

体型を考慮した和服の縫製方法（第2報）

仲 村 洋 子、永 野 順 子

I はじめに

私たちは「和服は着装が難しい」という欠点を、縫製の面から解決することを研究課題として取り組んでいる。それには一方において、従来の標準寸法の許容範囲、すなわち、標準寸法が体型の変化に、どの程度まで対応出来るかを着装実験によって究明してきた。そして他方では、体に合った和服を縫製するには、平面構成といえども個々の体格の把握が必要であることを考慮し、人体の計測とこれに基づく割り出し方法の研究を進めた。

前回第1報において、大正時代後期から試みられてきた「割り出し法」によって得られたデータを基に、私たちが想定した割り出し方法を用いて、スタンによる着装実験を行なった。その結果は種々の問題を抱えることとなった。同一の割り出し法を使用して縫製された試着衣が、体型別に矯正した物とはいえ、元は同じ形のスタンに着装させても、それぞれの体型によって、投げ掛ける問題が異なる点も指摘された。また、袖つけ寸法や衿にまで影響する衿肩明き寸法については、その採寸や縫製方法にも検討をせまられる結果となった。

今回はこうした多くの問題を抱えながらの「割り出し法」の試案ではあるが、実際の人体に着装させて観察することによって、問題点をより鮮明にすることとした。なお、被験者には現在被服学科4年次の学生の協力を得た。

II 被験者の体型と各部の寸法

1 被験者の体型

研究の目的が着装しやすい和服の縫製を追求することにあり、種々の着装実験を経て、その結果として想定された「割り出し法」の妥当性を究明するには、出来るだけ異なる体型の被験者を対象に、より多く当たることが望ましい。しかしながら数はおのずと制限されるので、今回は体型の異なる5例を取り上げ、採寸した結果が第1表である。これはたんに痩身・

肥満・長身・短身の別のみならず、側面体型が反り身な者や正面体型がいかり型・なで型など標準的なタイプを避けた形で着装実験を行なった。

第1表 採寸部位の計測結果

(単位はcm)

	採 寸 部 位	A	B	C	D	E
イ	身長	154.	160.	167.	157.	164.
ロ	尖椎より外踝まで	123.	130.	138.	128.	134.
ハ	肩中央から乳まで	20.5	24.	24.	25.	23.
ニ	ウエストから肩を通してウエストまで	78.	84.	89.	87.	85.
ホ	ウエストから背中心衿付線まで	36.5	37.	41.	38.	39.
ヘ	頸付根囲	35.	38.	38.	37.	38.5
ト	腰囲	84.	97.	99.	114.	98.
チ	掌囲	19.5	21.5	22.	21.5	20.5
リ	腕付根囲	35.	46.5	39.5	46.	39.

2 割り出し法による仕立上がり寸法

上記5例の計測結果を踏まえて、割り出し法によって計算した仕立上がり寸法は第2表の通りである。この表を考察して算出された数に幾つかの疑問が残るが、他は着装実験の結果を待つとして、肩幅と後幅の関係に触れておきたい。

〔備考4〕に記載してあるように、B・DおよびEの被験者の袖幅と肩幅が訂正してある。これは肩幅よりも後幅が広くなるので、後幅に合わせて肩幅を広くしたためである。現在の若者は背が高く、痩せぎみだという通念からは想像しえない結果であった。

肩幅は衿によって左右される。すなわち、衿から袖幅をひいたものが肩幅である。被験者のなかで一番小柄なAの後幅と肩幅の差が1.5cmと、標準寸法の2cmに達していない。その他はすべて肩ざしのない状態である。着装結果を見なければ早急な判断を下すことは出来ないが、衿の決め方に問題があるようにも思われる。

なお、Dの試着衣の縫製については後に触れるが、後幅と肩幅の差が大きいので、衿丈を身丈の2分の1にして肩幅を広げている。こうした処置にもかかわらず、袖幅30cm、肩幅34cmと、普通は袖幅を2cmくらい広くするほうが形が良いとされているのに対して、極端に肩幅が広がっているのので、着装した際の視覚に訴える影響がどのようなものであるか懸念される。

第2表 被験者の仕立上がり寸法

(単位はcm)

名称	割 り 出 し 法	A	B	C	D	E
身 丈	身長	154.	160.	167.	157.	164.
着 丈	実測（尖椎より外踝まで）	123.	130.	138.	128.	134.
衿	着丈 $\times \frac{1}{2} - 2. \sim 3.$	59.	62.5	66.5	61.5	64.5
肩 幅	衿－袖幅	28.5	30.2	32.2	30.	31.2
衿肩明き	頸付根囲 $\times \frac{1}{4}$	8.8	9.5	9.5	9.3	9.6
身八つ口	掌囲 $\times \frac{1}{2} + 2. \sim 4.$	12.8	13.8	14.	13.8	13.3
前 幅	腰囲 $\times 1.5 \times \frac{1}{2} \times \frac{1}{35}$	21.6	24.9	25.5	29.3	25.5
後 幅	腰囲 $\times 1.5 \times \frac{1}{2} \times \frac{15}{35}$	27.	31.2	31.8	36.6	31.5
衤 幅	腰囲 $\times 1.5 \times \frac{1}{2} \times \frac{8}{35}$	14.4	16.6	16.9	19.5	16.8
合 襖 幅	衤幅－1.5	12.9	15.1	15.4	18.	15.3
衤下がり	実測（肩中央から乳まで）	20.5	24.	24.	25.	23.
衤 下	身丈 $\times \frac{1}{2} + 2. \sim 4.$	80.	83.	86.5	81.5	85.
袖 丈	身丈 $\times \frac{1}{3}$	51.3	53.3	55.7	52.3	54.7
袖 つ け	腕付根囲 $\div 2 + 2. \sim 4.$	20.5	26.3	22.8	26.	22.5
袖 口	掌囲 $\times \frac{1}{2} + 10. \sim 12.$	20.8	21.8	22.	21.8	21.3
袖 幅	衤 $\times \frac{1}{2} + 1.$ 内外	30.5	32.3	34.3	31.8	33.3
衤 幅	規定寸法	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5
繰り越し	採寸部位（ニーホ $\times 2$ ） $\div 3$	1.7	3.3	2.3	3.7	2.3

〔備考〕 1. 枉下がりは肩山からの寸法記載

2. 衿肩明きは上がり寸法記載

3. 寸法に幅のあるものはその真中の寸法を採用

4. 試着衣縫製の際割り出し法により得た寸法を訂正した箇所

試着衣縫製寸法 B……袖幅31.3 肩幅31.2

D.....袖幅30. 肩幅34.

衿64. 後幅35.

前幅30.9

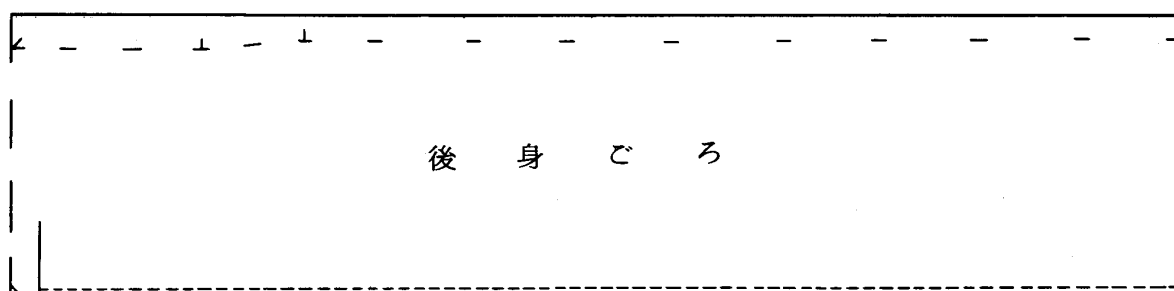
E……袖幅33. 肩幅31.5

III 着装実験

1 試着衣の縫製

第2表の仕立上がり寸法を用いて、5枚の試着衣を縫製した。材料は市販の綿100%の縞木綿を使用し、しるしのつけ方・縫い方は前回同様『平面構成学実習Ⅰ』⁽¹⁾を参考にしている。ただし、衿つけについては『学習指導の研究』⁽²⁾に記されている、待針の打ち方を採用している。これは「繰り越し」を算出する際、同書に記載されている測定方法を採用したためである。

ここで試着衣Dの肩幅より後幅が1cm広くなったための処理について、第1図によって提示しておく。これはどうしても後幅を広くしたいが、衿丈はあまり長く出来ない場合に、本学で用いる方法で、袖つけ線が逆の斜線にならないようにとられる処置である。したがって、身八つ口の間を斜めにするので、その吸収能力にはおのずと限界がある。



第1図 試着衣Dの脇のしるしのつけ方

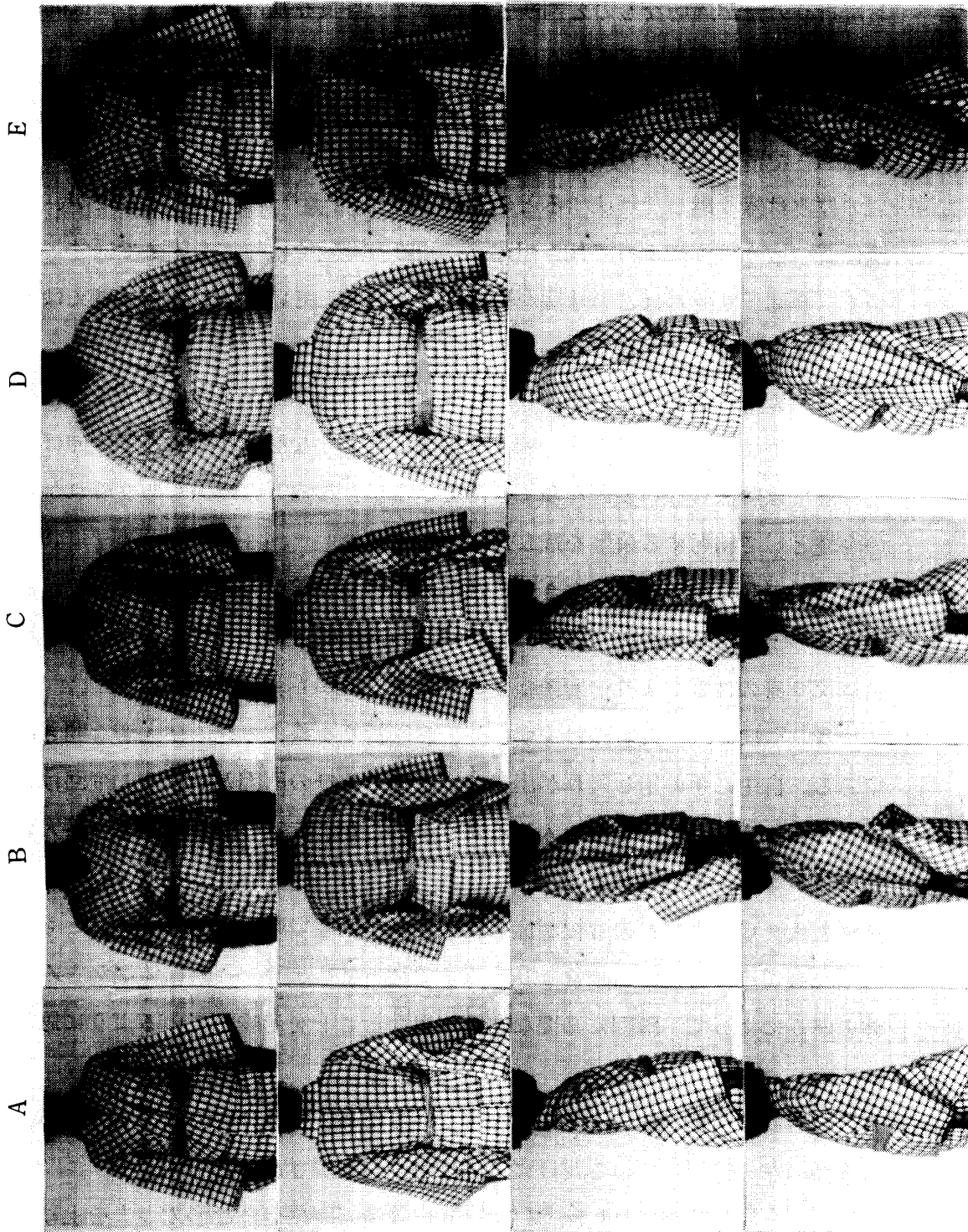
このほか、今回も寸法を重視するため布幅の不足は補い、手間の省力化のため縫製上省略できる箇所はなるべく省略している。

2 着装条件

異なる体型の被験者による着装実験であるから、出来るだけ同一条件で着装させることが望ましい。まず、下着はスリップとしてブラジャーをはずし、着つけは研究者が行ない、少し歩いてもらって無理のない着かたであることを確認した。なお、着つける際には次の5項目を注意した。

- (1) 背縫は背中心に合わせ、お端折りから下の裾まで一直線になるようにする。
- (2) 左前身ごろの衿先を右腰骨にあてる。
- (3) 肩山を肩線に合わせる。

- (4) 肩から胸にかけて出来るだけしわの寄らないように注意し、上半身と下半身の衽つけ線を揃えることによって、自然の状態で頸窩点直下に前面衿の交差位置を決める。
- (5) 身幅のゆとりは両脇に寄せる。



第2図 着装実験 前面・背面・左右側面

3 実験結果

着装した各被験者を前面・背面および両側面から撮影したのが第2図である。着装時の観察と写真によって検討し、その結果を前回の「各部寸法の割り出し方」の順序に従って記述する。

- (1)身丈……お端折りの量が適切なものと判断されるので、身長を基準にすることには問題はない。しかし、痩せぎみのAについては背面のお端折り位置が低く、反り身のEの前面のお端折り線が気になる。これはお端折りの量によるものではなく、衿肩明きや衿のつけ方の影響と考えてもよい。
- (2)着丈……肩の厚みは繰り越しで解決するとの見解で、「尖椎より外踝まで」としたが、外踝位置の取りようによって長さが違ってくる。洋裁では総丈を床まで採寸している。今回、私たちはこの寸法を桁算出の基準としている点からも、着丈は床までとする方が正確な数値が得られる。
- (3)衿……概して衿丈の不足が目につく。B・Eのようないかり型のものにとっては、なおのこと不足は明らかである。着丈で指摘したような形で、衿丈を多少伸ばした程度では解決しない要因を多く含んでいるが、布幅との関係もありこれからの課題として検討する余地を残した。
- (4)衿肩明き……被験者Eの衿肩明きは大き過ぎたため、衿つけ線が頸側点から離れて、衿がねた形となっている。一般的に直線裁ちの衿肩明きは広く見えるが、Eの場合は反り身の体型がより一層誇張されて見えるのかもしれない。
- (5)身八つ口……身八つ口の大小は着つけをする時、お端折りを整えるために大切な開き口である。自由に手の出し入れが出来ないとほころびの原因ともなる。今回は掌囲を計測する際、親指を内に入れるようにしたが、5本の指を揃えて一番大きいところを測ることにする。
- (6)身幅……被験者A・CおよびDの身幅が広く、ゆとりが両脇で吸収しきれずに、ともすれば左身ごろの衿先が右腰骨より後ろまで廻ってしまう。これは体型からみて体の厚みによって、腰囲に必要な布幅が異なることを示唆しているように思われる。
Dの試着衣は前幅が30.9cmと広がっているため、衿つけ線の斜めが大きい。
縞模様の布を使用しているだけに裾の広がり強調される。
- (7)合づま幅……合づま幅を衿幅より1.5cm減じるのは、着装の時に自然な形でつまを上げるためである。腰囲の部分 coverage するのは裾よりも衿先により近いので、合づま幅を

衽幅と同寸にするという考え方もあるが、身幅で触れたように前身ごろの衽つけ線との係わり等で腰囲の寸法を再考する必要がある。

(8)衽下がり……いわゆる剣先位置は衽肩明き寸法とともに、前面衽の交差位置を決めるポイントとなる。いかり型のBとなで型のDとの衽下がり寸法の差は1cmであるが、着装すると違った表情を見せる。Eの場合は衽がねているためか剣先位置が前中央より横にずれている。

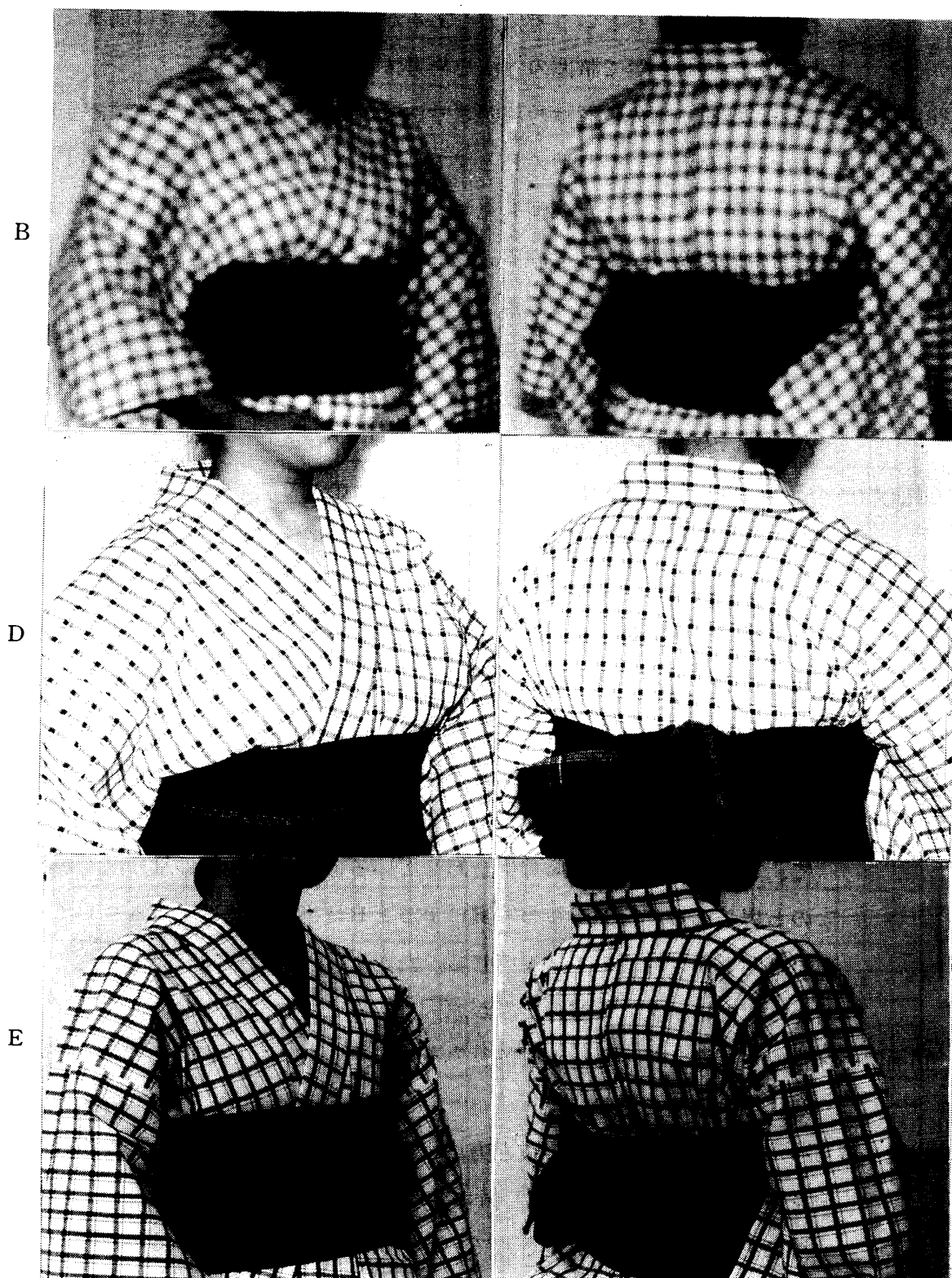
(9)衽下……同じ割り出し法によって導き出された寸法でも、体型によって衽先がお端折りの下に出てしまうものがある。今回はCとDの衽下が短くて衽先が下がっている。これは上半身の体型によって微妙に違ってくるものらしく、お端折りの量が少ない場合に衽先が覗く。

(10)袖丈……長身であれば当然袖丈が長くなる。身丈との釣り合いを取るという意味では合理的な考えであるが、袖丈は流行に左右されやすい部分であり、人間の目は感覚的なもので、少しの違いも異和感を持たせることを実証する結果となった。

(11)袖付……第1報で一番問題となった点で、第3図にB・DおよびEに帯を着装させた写真を掲載して、3種の相違を検討した。Eは腕付根囲が小さく、B・Dは46.5cm、46cmと腕が太い。Eの場合は袖付寸法にさしたる問題はないが、B・Dの前面は帯のために袖つけが押し上げられた形を呈する。現在の和服の着つけは肩山を肩線より後ろにずらして着装し、いわゆる、衣紋を抜いて着るのに対して、本実験では肩山を肩線に合わせているので、前袖付の量に問題が生じたものと思われる。背面からの写真によるとBは半幅帯ではすっきりしているが、Dは明らかに寸法の不足を感じる。ただし、これは後幅とのからみで仕方がなかったとはいえ、肩幅の広さが原因であることは間違いない。

(12)袖口……全般に標準より小さいが動的行為を対象としていない本研究では、是非を究明しにくい箇所である。

(13)繰り越し……繰り越し量は衣紋の抜き方によるが、肩山を肩線に合わせた場合はその量を多く必要とする。繰り越し量については羽生京子⁽³⁾の研究によって、衽肩明き寸法に影響することが実証されているが、直線裁ちをしている衽肩明きとの関係や縫製方法ともからみ合ってくるので、一概には言えないが、背中心衽付線位置の決定に不透明なところがある。



第3図 着装実験 上半身

IV ま と め

以上、各部について観察結果を述べてきたが、体型の違いはスタンの時とは異なり、一人一人違った表情を持っている。被験者Dについて、後幅に合わせるために肩幅を広げた結果が、写真でも判るように肩より落ちて、上腕中間くらいに袖付線が下がっている。身幅からみるとゆったりとして着ごちもよさそうであるが、袖付寸法にも影響し、袖幅がいかにも狭いことが見た目にも異和感をもたらす。

このように一つの是正が、また新たな問題を提供することになる。総合的に着よい、形よい、縫いやすいを究明するには、着装する各自の人体の形態的な特徴を、採寸による把握のみではなく、従来から試みられている体型による縫製方法も取り入れながら研究を進める必要がある。今後はこれらのことも考え合わせて、より多くの実際例に当たり、割り出し法の修正を試みたい。

〔付記〕

本研究を作成するにあたって、和裁研究室の羽生京子講師、伊藤瑞香氏、五十嵐理子氏のご協力をえた。

文献

- (1) 永野順子：平面構成学実習Ⅰ 衣生活研究会 1983 P. 46～85
- (2) 成田 順：家庭科 学習指導の研究 被服Ⅰ編 教育図書株式会社 1973 P. 294～316
- (3) 羽生京子：和洋女子大学紀要 28 家政系編 P. 83～92 1988

仲 村 洋 子（本学専任講師）

永 野 順 子（本 学 教 授）